



軽井沢大賀ホール 元相談役・支配人 大西泰輔さん

世界一の音楽ホールをつくりたい

ソニーの社長、最高経営責任者を歴任した故大賀典雄氏が私財を投じてつくった軽井沢大賀ホール。

五角形の建物に、内装材にはカラマツ(落葉松)を多用したこの音楽ホールを「世界一音がいい」と評する専門家は少なくない。

大賀氏の夢の実現に伴走し、長くこのホールの支配人を務めた大西泰輔さんに「世界一の音楽ホール」づくりの秘話を聞いた。

五角形が生み出す豊かな音響

観劇は、劇場に向かって家を出たときから始まると言った演劇評論家があった。今日の芝居の見どころはどこか、役者の演技はどうだろうか、とあれこれ思いをめぐらしながら劇場に向かうとき、すでに観劇は始まっているというのである。

音楽もまた同じようなことが言えるだろう。今日はいい演奏が聴ける

だろうか、どんな感動が待っているだろうか、と胸を高鳴らせながら会場に向かうとき、すでに音楽体験は始まっているのだ。そして軽井沢大賀ホールの場合、その姿が見えたとき、最初の感動が身を包む。静かな水面を湛える矢ヶ崎池の畔に建ち、背景には離山と浅間山の流麗な姿がくっきり浮かぶ。この美しい大自然のハーモニーが、すでにひとつの楽曲のようでさえあるのだ。

「最初のきっかけは、大賀さんの奥様でピアニストの緑さんが、ソニーを退職したら軽井沢に音楽ホールをつくったら、と提案したことだったそうです。経営者であると同時に音楽家でもあった大賀さんは、自然の中であって、誰にでも開かれた音楽ホールをつくりたいという夢があったんです。それで私に『一緒にやらないか』と声をかけてくれたんです」
2005年の開館当初から2015年ま



おおにしたいすけ 1939年、横浜市生まれ。青山学院大学卒業後、博報堂を経てCBS・ソニーレコード（現ソニー・ミュージックエンタテインメント）入社。洋楽を担当し、マイケル・ジャクソン、ビリー・ジョエル、ポール・サイモンらと親交を深める。CBS・ソニーコミュニケーションズ社長を経て、2004年、財団法人（現公益財団法人）軽井沢大賀ホール常務理事・支配人に就任し、大賀典雄氏とともに世界一の音楽ホールづくりに邁進。2015年に退任するまで、大賀氏の遺志を受け継ぎホールの運営に力を注いだ。

で同ホールの支配人として運営に携わっていた大西泰輔さんが言う。

軽井沢大賀ホールは客席784席（車椅子、合唱席含まず）の中規模ホール。大賀さんは若い人も手頃な料金で音楽を楽しめるようにとの思いから、2階は全部立見席にした（その後、一部を椅子席に改修）。しかし一方で音響にはとことんこだわった。建物の平面形状を世界でもほとんど例のない五角形にしたのもそのためだ。音は光と同じように直進性がある。したがって四角形だと、壁に直角に当たった音はそのまま直角に反対方向の壁に反響し、そこでまた直角に、という具合に壁と壁の間で往復運動を繰り返し、音と音がぶつかり合ってしまう。ところが五角形だと、直角に反響した音が反対側の壁に当たるときの入射角は直角で

はない。だから壁と壁の間を往復運動することなく、音がホール内を限なく回るようになる。

同じような理由から、2階席の壁も斜めに設えられている。そうすることで、壁に当たった音が客席の方向に反響するのだという。

内装材には落葉松を多用

「私は実際にいろいろな位置の椅子に座って演奏会などを聴きましたが、どの席でも同じように音が聴こえます。しかもとてもクリアな音で、一つひとつの楽器の音のはっきり聴き分けられるほどです」

と、大西さん。

内装材に木を使ったのも大賀さんのこだわりだった。木は音の響きがいいし、自然な暖かみや優しさが感

じられる。せっかく軽井沢の豊かな自然の中につくるのだから、木のぬくもりを生かそうというのが大賀さんの発想だった。

「できるだけ地元の木を使おうということで、軽井沢に多い落葉松を使いました。しかも大賀さんは木にも性格があり、性格がバラバラだと音の響きもバラバラになってしまうから、同じ場所に生えている松を使うように指示しました。内装にここまでたくさんの松を使っているホールは、他にないかもしれません」

檜の板でつくられたステージから上を見上げると、五角形の音響反射板が3つ、天井から吊り下げられている（表紙写真）。この反響板は上下に移動させることができる。ピアノやバイオリンのソロ演奏のときには、反響板を下げて客席に届く音の



軽井沢大賀ホールは、JR、しなの鉄道の軽井沢駅から徒歩約7分。矢ヶ崎公園内に位置している。

ボリュームを大きくし、オーケストラなどの演奏時には反響板を上げて、ボリュームが大きくなりすぎないようにするのだ。

「松の集成材をルーバー状に並べた壁は、木と木の間に柔らかい素材を挟んで雑音を吸収するようにしています。ただ、ステージの後ろの壁は客席に音を反響させる必要があるので、木と木の間に硬い素材を入れています。客席の椅子も座面の裏側に縦スリットの隙間をつくり、雑音を吸収できるようにしています」

ちなみにこの椅子、一般的な音楽ホールで使われている椅子に比べると、幅がやや広めのサイズになっている。大賀さん自身、大柄だったので、せっかくいい音楽を聴きにきた客に、狭い椅子で窮屈な思いをさせたくなかったのだろう。

「やればできるじゃないか」

音楽ホールの性能を表すときよく使われるのが、残響時間という指標だ。一般にクラシックの場合、2秒が最適と言われている。しかしそれは大規模ホールでのこと。中規模ホールで残響時間が2秒もあると音が響きすぎて割れてしまう危険がある。そこで軽井沢大賀ホールは、満席の状態では1.7秒となるように設計された。

建物が完成し、内装もほぼ終えた2005年の早春、地元の人の協力を得て、客席を満席にした状態での音響テストを実施。測定の結果、音響時間は設計通りの1.7秒を記録した。

2006年開催の「春の音楽祭」。大賀典雄指揮、東京フィルハーモニー交響楽団で、モーツァルトの『交響曲第40番ト短調』などを演奏。

残響時間の適否は、演奏の評価にまでつながることもある。関東某県のオーケストラはいつも、残響時間の短い地元のホールで演奏会を行っていた。そのオーケストラがあるとき、軽井沢大賀ホールで演奏会を行った。いつも関東の地元でこのオーケストラの演奏を聴いているファンが、演奏会終了後、アンケートにこう書いていた。

「やればできるじゃないか」

ホールの音がいかにかいを物語るエピソードである。

この音の良さに魅かれて、軽井沢大賀ホールでCDのレコーディングを行う演奏家もいる。昨年、惜しまれつつ亡くなった日本を代表するピアニストの中村紘子さんは、デビュー50周年を記念するアルバムをつくる時、ほとんどの演奏をこのホール



©Eisuke Miyoshi



ルでレコーディングした。前橋汀子さんや千住真理子さんもレコーディングをしたことがあるという。

そんな超一流の演奏家たちが集う一方で、軽井沢大賀ホールでは地元の音楽教室の発表会で子どもたちが楽器の演奏をしたり、小中学校の合唱大会が開かれたりもする。

歳月とともに音が良くなる

「演奏者にとっても、いいホールで演奏すると、気分が高まり、結果的に普段よりいい演奏ができるようになったりするものです」

と語る大西さんは以前、合唱団を組織し、自分も団員として参加していたことがある。5年前、軽井沢大賀ホールで春の音楽祭が開かれたとき、その合唱団を率いてステージに

“く”の字型の2階席の壁。手すりのすぐ下は音が天井にぶつかるように、曲がった下の方は、音が客席に響くように設計。

立ち、東京フィルハーモニー交響楽団の演奏でモーツァルトのレクイエムを合唱した。

「自分がつくって育てたようなホールですからね、最高の気分でしたよ。でも、客席に見知った顔がたくさんあり、照れくさい気持ちもありました」

そういつて笑いながら大西さんは懐かしそうに目を細める。

軽井沢大賀ホールは、ステージから客席の最後部までの距離が16メートルほどしかない。だから最後部の席からもステージ上の演奏者がよく見えるし、演奏者からも客席がよく見える。そのせいもあるのだろう、

座面の裏側には縦スリットの隙間をつくり、雑音を吸収する。椅子の幅は広めに。前後の間隔もゆとりのある広さをとっている。

素晴らしい演奏が行われると、空間全体に強い一体感が生まれるという。

「大賀さんは『歳月を経るとともに音響的な味わいを増すようなホールにしたい』と話していました。実際今は、オープン当初よりもいい音になっているように感じます。大賀さんも今頃、空の上で耳を澄ましているんじゃないですか」

ホールの天井にはトップライトがあり、晴れた日には陽光が降り注ぐ。客席の後方にも窓があり、夕方には夕日が射し込む。春には咲き誇る花々が見え、冬には降りしきる雪景色が窓から望める。演奏者も客も、ときの移ろい、季節の移ろいを感じながら演奏し、聴き入る。自然の中で、自然とともに豊かな調べを奏でる軽井沢大賀ホールは、それ自体、ひとつの楽器なのかもしれない。

